

Cantuta

No. 45



石の木 (Arbol de Piedra) ポトシ県南リペス地方 撮影者:白川 光徳

1. リベラルタ近郊トゥミチュカ公園と先住民 ………… 佐藤 信壽 2. 在ボリビア日本大使館勤務の思い出 ……………… 黒澤 啓 3. 日本人が見たリベラルタ 一その7 ……… 大島 正裕

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. リベラルタ近郊トゥミチュカ 公園と先住民

前ボリビア日系協会連合会事務局長 佐藤 信壽

ボリビアの北東部ベニ県リベラルタ市、 この町には多くの日系人がいる。

この地域は 1910 年代、アマゾン地域 がゴムブームの時にペルーへ移住した日 本人が多く転住して来たところであり、 その子孫は最も若い 6 世まででおよそ 10,000 人近くになると推定される。

ゴムブームの時代には、その集積の中心地は、ブラジルではマナウスが、ペルーではイキトスが大都市となったが、ボリビアのリベラルタはそのような大都市には発展せず、今でも小さな一地方都市である。リベラルタ周辺は、インカ帝国の時代には、「パイティティ(Paititi:スペイン語では El Dorado: 黄金郷)」と呼ばれた地域の一部に当るらしい。

また、この町のベニ川の対岸には、ラス・ピエドラス(岩石)という村があり、そこはインカ帝国の最東部の砦があったということで、遺跡調査なども行なわれたことがあったようだが、現在は、ほとんど調査が行なわれておらず、新開拓農村となっている。

今でも、タカナ、エセエハ、チャコボ 族などの先住民の村があり、昔のような 部族間の抗争といった野蛮な行為は無く、 普通の村とそう変わりはなくなっている が、一部の村では外部との交流がないた め、その種族特有の言語が語られ生活上 では固有の風俗習慣が残っている。



写真1-1 Google earth で見たトゥミチュカ



写真1-2 焼畑からバナナを収穫するチャコボ族 の女性

今、リベラルタ市近郊の観光地の一つとなっている「トゥミチュカ」(Tumi Chuca)公園は、1955 年から 1981 年までは、キリスト教関係の非営利少数言語研究機関である国際 SIL(Summer Institute of Linguistics)による先住民族言語研究本部及び先住民族教育施設として使用されていたところである。

スワレス湖のほとりに作られた施設は、湖にある島にモタク・ヤシの樹木が繁茂しているところからタカナ語の「トゥミチュカ」(モタクの島)という名称で呼ばれて現在の地名となり、「ベニ」という県名もタカナ語で「風」という意味だとい

う。リベラルタの町から 30km 程離れた イボン川の流域やヘネスワイヤ川流域に はチャコボ族の村がある。



写真1-3 ハンモックで休憩する チャコボ族の女性

ボリビアは、1952年のボリビア革命によって普通選挙を導入し、先住民への差別的法律を撤廃したりしたが、先住民族への教育には大きな壁があった。このためボリビア政府は、各地に散在する先住民をボリビア文化に組み込むために、1954年8月、国際 SIL の言語プログラムとの協力を呼び掛けたことがこの言語プロジェクトの発端になった。

1955年6月から3ヵ月かけて、当初の研究施設が完成したが、当時この地域は、夜にはジャガーの咆哮が聞こえる原生林地帯であり、施設建設には多くの苦労があった。施設完成後には、言語の専門研究者が施設に移り、チャコボ、イテネス、タカナ等の同地区周辺の3言語の研究から始め、同時に、少し離れた地区の、レコ、エセエハ、シリオノ、チマネ、イトナマ、バウレ、イグナシアノ、カビネニャ等の諸族ともコンタクトを取るように

なり、一年後の1956年—1957年からは、 バウレ、イトナマ、チパヤ(オルロ)な どの言語研究が始められた。

このような少数グループ先住民の言語が 10 年間研究され、その後、1966 年から衛生奨励普及訓練が行なわれるようになり、看護師養成コースに発展して、同コースで訓練を受けた看護師が自分の村へ戻り母語で勤務し保健省からの手当ても受けられるようになった。1 年後の1967 年には、農業と牧畜の小規模技術訓練が行われ、その後、大工技術や機械技術の訓練も行われた。

また、1967年からは、母語とスペイン語のバイリンガル教師養成コースも始められ、多くのバイリンガル教師が誕生し、その中の53名はそれぞれの出身村に戻り、1981年までに全体で1,000名近い生徒を教えたということである。

また、これらの訓練コースは、それまで 10 年間の先住民諸族言語の研究期間中に、各村に滞在した言語学者とそれぞれの村人の間で共有された課題に沿って作成された。

その時に、先住民が言っていたのは、「今までは、一方的にスペイン語を強要し、自分たちの生活を変えようとしていたが、このプロジェクトでは逆で、学者・研究者が自分たちのことを学ぼうとしている。だから受入れられる。」ということだったようである。この言語研究と先住民訓練の期間中には、その施設がある2ヘクタールの地域は、軍の協力を受け、厳重に管理された閉鎖地区であったとい

う。

この「トゥミチュカ」は今では公園となり、誰でもが出入りでき、湖で泳いだり、バーベキューをしたりして休日を楽しめる場となっている。一方、現在リベラルタの35歳以下の若い人たちは、この町の周辺に、多くの先住民の人達がいたこと、今でもいることを知らず、街中で物乞いをしているエセエハ族(通称:チャマ)を見て、先住民=無学な貧困者との意識を持ち、自分たちの血の中に先住民の血が混ざっていることを否定する傾向があるようだ。

1978 年から 1981 年に IICA の青年海 外協力隊員としてボリビア国立人類学研 究所で活動された木村秀雄東京大学名誉 教授は、リベラルタ周辺のエセエハ族を 調査され、「民族の世界史 13 民族交錯 のアメリカ大陸 大貫良夫編」(山川出版 社)の中で『… 熱帯低地の原住民文化 の独自性は今急速に消え去りつつある。 キリスト教伝道師たちを中心とする二言 語教育によって彼ら自身の言葉を守ろう という努力は続けられているものの、原 住民文化が周囲の非原住民文化のなかに 埋没してゆく趨勢は止めようがないよう に見える。ほとんどの熱帯低地原住民集 団は自らの文化を守るにはあまりにも集 団の規模が小さい。(一部省略) 熱帯低 地の原住民の社会的・文化的自律はもは や崖っぷちに立たされているといっても 過言ではない。…』(p.262)

また、1987年頃にチャコボ族を調査された方からは、「…市場経済の浸透は、ま

ずチャコボ族社会に経済的変化を及ぼし た。それはゴム採集人(村人)が、ゴム 取引のからくり一即ち、仲買人が物々交 換の取引で意のままに価格を操ることに よって生ゴムを非常に安い価格で買い叩 き、反対に生活必需品をはじめとする 様々な品物をより高い価格で売りつける システム―や現物支給の前貸しによって 仲買人に借金し、また盲教師には現物支 給の前借りや病気治療などの非常事態に 要する様々な経費を借金することによっ て、仲買人や盲教師がゴム採集人である 先住民、ひいてはその村人社会全体を経 済的に巧みに支配・統制できるようにな った。つまり仲買人や宣教師への経済的 従属である。…」「…市場経済の浸透は、 彼等の経済的状況を悪化させ自給自足的 な生活をより困難なものにするだけでは なく、未発達でありながらも、村長、保 健衛生士、学校教師などの職業分化をチ ャコボ族社会に生み出している。…」「… 共同体内に職業分化が進むなかで、伝統 的な指導者の形態と役割を大きく変化さ せたことはとりわけ重要である。つまり、 半遊動の部族社会において指導的立場に あった者は、優れた狩人、勇敢な戦士、 呪術・宗教的職能者 (シャーマン)・長老 であったが、現在のチャコボ社会のリー ダーは、外部社会との接触・交渉に必要 な語学力(スペイン語)の読み・書き・ 計算に秀でていることが必要不可欠であ り、伝統的な要素を兼ね備えていない。 この村における現在のチャコボ族社会の リーダーの資格は、まさに盲教師によっ

て始められた教化によって会得したものである。| 等々聞いたことがある。

現在は、リベラルタでは、ゴムの売買は行われていないので、彼らは、本来の狩猟、漁労、小規模農業を基本とし、バナナ、ユカ、果物等を、仲買人を通して町に出荷し現金収入としているほか、カスターニャ(アマゾンナッツ)の収穫や木材の伐採労働などを行っている。(ゴムの時と同じで搾取の現実はあまり変わっていないようである。)

ボリビアは、2009年3月18日にそれ までの「共和国」から「多民族国」に国 名を変更した。

しかし、既にエスニック・アイデンティティを失ってしまった彼ら少数民族にとって「多民族国」というナショナル・アイデンティティはどのようなものになるのであろうか……。



写真1-4 焼畑からバナナを収穫するチャコボ族 の女性

参考:

- ・小冊子「TUMI CHUCA Símbolo de Servicio al Indígena Boliviano 」 (INSTITUTO LINGÜISTICO DE VERANO)
- ・各先住民の説明は Web サイト:

http://pueblosindigenas.bvsp.org.bo/php (スペイン語サイト)

・「民族の世界史 13 民族交錯のアメリカ大陸」大貫良夫編(山川出版社)

(終わり)



写真1-5 収穫したユカを切って"チチャ"という 飲料を作っているところ

2. 在ボリビア日本大使館勤務の 思い出

一般社団法人日本ボリビア協会理事 黒澤 啓

昨日のことは覚えてなくても、昔のことは鮮明に覚えているという歳になりました。もう 40 年近く前のことですが、1984年の7月下旬から1986年8月まで、在ボリビア日本大使館に勤務した時の思い出を書かせていただきます。

当時、JICAから入団4,5年目の若手職員を数名外務省に出向させ、本省に1年、その後大使館に2,3年勤務させるという制度がありました。私の同期から

5名が出向することになり、1983年4月から1年間は経済協力局(現在の国際協力局)で ODA に関わる実務に携わり、翌1984年4月から地域局での実務研修を経たうえで大使館に派遣されることになりました。どの大使館に派遣されるかは、1年間の経済協力局勤務中に決まりますが、どこに行くかでその後の人生も変わるため、希望通りのところに行けるよう、勤務の傍ら、情報収集やロビー活動などを繰り広げました。

私自身は学生時代にラテンアメリカと は縁もゆかりもありませんでしたが、 IICA 入団後に各国から来た研修員たち と触れ合う中で、ラテンの魅力に取りつ かれ、スペイン語の語学学校にも通いな がら、いつの日か中南米に行くことを夢 見てました。そういう状況で、我々5人 の行き先が、エジプト、ザイール、フィ ジー、チリ、ボリビアであることがわか ったため、この場で書くのも気が引けま すが、生活環境もよく、美人が多いとい う3C(コスタリカ、コロンビア、チリ、 一説には、いずれかの国の代わりにキュ ーバ))であるチリをひそかに狙ってまし た。ところが、ふたを開けてみれば、チ リには私の同期が行くことになり、私は ボリビアに行くことになってしまいまし た(後で聞いたところによると、当時ち ょうど一時帰国していたボリビアの藪忠 綱大使が、人事課に相談して5人の中か ら私を指名したとのことでしたが、いっ たい何が決めた要因だったのかは結局大 使に聞けずじまいでした)。因みに、ボリ

ビア大使館への JICA からの出向者は、 熊倉晃さん、斎藤寛志さん、小林雅彦さ んに次いで私が4人目でした。私の後に、 高野剛さん、上島篤さん、木下雅司さん と続きますが、確か JICA からの出向は 木下さんで終わったように思います。

ボリビアと言えば、思い浮かぶのはチ チカカ湖や、世界一標高の高い首都ラパ スの他、映画「明日に向かって撃て」(原 題は主人公 2 人の名前である Butch Cassidy and the Sundance Kid) に出てく るシーンだけでした。これは、西部開拓 時代のアメリカで銀行強盗をやっていた 二人が指名手配されて逃げ場を失い、当 時、銀で栄えていたボリビアで強盗をや ろうと期待に満ちて行ってみたところ、 列車から降りてみたら駅前には豚が歩き 回っていて、二人が思っていたような国 ではないことがわかり、二人が呆然とし ているというシーンです。夢見ていた3 Cとのギャップの大きさに、しばらく私 も呆然としましたが、決まった以上は運 命を受け入れようと心に決め、気を取り 直して7月の赴任に向けて準備を始めま した。

1984年4月からは、ボリビアを所掌している中南米局中南米一課に配属されました。ここで赴任まで、ボリビアや大使館の業務などついて実務研修をすることになっていました。ところが着任してびっくり。5月にブラジルのフィゲレード大統領が訪日するため、中南米一課は課を挙げて受け入れ準備にあたっており、とても優雅な研修どころではなくなって

しまいました。大統領と日本の首相との 間で何を話し何を決めるのか、ブラジル にお土産としてどのような ODA 案件を 新たにコミットするのかなどのいわゆる サブ(サブスタンス・中身の略)に加え て、訪日した一行のホテルの部屋割り、 レセプションの席順、車列の順、記者会 見の設定などのいわゆるロジ(ロジステ ィックスの略)など、準備することは山 のようにあり、しかも、宮内庁、関係省 庁、外務省儀典局等様々な関係者との調 整が必要なため、連日、深夜2時、3時 まで残業続きの日々が5月中旬まで続き ました。夜中の12時から打ち合わせとい うことも頻繁にあり、外国の国家元首が 訪日するというのは、いかに準備が大変 なのかを身をもって体験しました。今で も、どこかの国の元首が訪日するという ニュースを見ると、今頃外務省の担当地 域局は大変なのだろうなと思ってしまい ます。

ブラジル大統領の訪日が無事に済んだことにより、そうした激務からも解放され、7月下旬にボリビアに赴任することになりました。別送品は紛失して届かないことが多いことや、前任者から家電製品などを譲りうけることになっていたこと、また、日本食へのこだわりもあまりなかったため、スーツケース数個という身軽な赴任でした。その後、30年後にセルビアに赴任した際には、身の回り品や日本食、書籍、パソコン、カメラ等々十数個の段ボールを別送したことを考えると、歳をとるに連れ、モノが増えるとと

もに、日本食や日本語の書籍へのこだわ りが強くなっていることを実感しました。 ラパスの日本大使館は街の中心部、標 高約3700mのところにあり、以前大統領 を務めていた人の私邸だったそうです。 40年たった今でも同じ場所にあり、時折 Google Map で写真を見て懐かしんでい ます。当時の大使館は、藪大使以下、参 事官、政務担当書記官、広報文化担当書 記官、経理担当理事官、専門調査員、そ して、経済協力担当書記官である小生と いう7人体制でした。小さな大使館だっ たため、経済協力すべてを担当させても らうとともに、移住関係の業務も担当さ せてもらえたため、非常にやりがいのあ る仕事でした。外務省に出向した5人の うち、エジプト大使館に赴任した同期は、 大きな大使館で各省の出向者も多かった ため、経済協力を担当させてもらえなか ったり、私が憧れたチリに赴任した同期 は、経済協力を担当したものの、チリに 対する ODA 自体がそれほど多くなかっ たため、あまり仕事がなかったことを考 えると、ボリビアに赴任できたのは幸運 だったのだと認識しました。

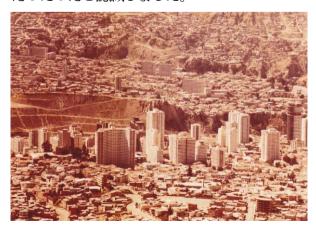


写真2-1 1985 年頃のラパス。右端の丸いビル (Torres de America) に住んでいました。

当時のボリビアには、ラパスの日本大 使館のほか、サンタクルスに領事事務所 があり、また JICA は、サンタクルスに 事務所、サンファンとオキナワ移住地に 支所、ラパスに出張所がありました。私 の担当業務である経済協力に関しては、 普段はラパスの IICA 出張所と相談しな がら、ODA 案件の発掘・形成や、実施 中のプロジェクトの進捗管理、専門家や 協力隊員の支援、来訪する調査団のアテ ンド、終了案件のフォローアップなどを 行っていました。 当時は、まだ ODA に 対する日本政府の方針を取りまとめた開 発協力大綱や、国ごとの戦略を決めた国 別開発協力方針もなかったため、ボリビ アに対する援助方針も特に定められてな い中で、ボリビアの開発にとって、どう いう分野でどういう案件を実施していく のがいいのかをボリビア政府とも協議し ながら決めていきました。



写真2-2 1985 年秋、公邸で行われた藪大使送別会 (中央が藪大使夫妻、右から3番目が筆者)

当時、日本政府が特に力を入れていた のは医療分野で、私が赴任した時には、 無償資金協力で既に以下の病院が建てら れていました。

- ✓ ラ・パス消化器疾患研究センター (1977 年 7 億円)
- ✓ スクレ消化器疾患研究センター (1978年8億円)
- ✓ コチャバンバ消化器疾患研究センター(1979 年 11 億円)
- ✓ コチャバンバ国立公衆衛生専門 学校(1980 年 14 億円)
- ✓ トリニダ母子病院(1981 年 8 億 円、1982 年 7 億円)
- ✓ サンタクルス総合病院(1983 年 5.05 億円、1984 年 18.47 億円、 1985 年 18.48 億円)

病院だけ建てても、医療技術が伴わなけ れば意味がないので、消化器疾患の早期 診断と治療のための技術協力を 1977 年 4月から1984年3月までラパス、スクレ、 コチャバンバの3センターで実施し、こ の 7 年間で延べ 80 名の専門家を日本か ら派遣するとともに、35名の研修員をボ リビアから日本に受け入れたり、総額6 億円近い機材供与が行われました。また、 これらの病院が富裕層にだけ利用されて いるとの批判があったため、ソーシャル ワーカーを配置し、所得に応じた診療費 を設定して、貧しい人でも治療が受けら れるような制度も導入しました。このよ うに3センターには手厚い支援が行われ た一方で、コチャバンバの国立公衆衛生 専門学校には、専門家として看護師1名 が、また、トリニダ母子病院については、 青年海外協力隊員として看護師数名が派 遣されたのみでした。

このように、ボリビアに対しては、無

償資金協力で病院をいくつも建てるとと もに、技術協力により専門家を派遣して 技術指導を長年にわたって行ってきたた め、私が赴任した時には、本省サイドで は、ボリビアに対してもうこれ以上医療 援助は必要ないのではないかとの空気が 漂っていました。しかし、年間数万パー セントのインフレに陥っていたボリビア では、医療従事者のみならず、医薬品や X線フィルムなどの消耗品も不足してお り、当時建設中だったサンタクルス総合 病院が完成しても、このままでは病院自 体が機能しないことが懸念されていまし た。そこで、本省や JICA に対して、サ ンタクルス総合病院への技術協力の必要 性を訴え続け、当初は全く取り合っても らえませんでしたが、最終的には必要性 を理解してもらうことができ、完成後、 国立病院医療センター(現、国立国際医 療研究センター)を中心とするチームに より、1987年12月から5年間の技術協 力が実施されることになりました。

余談ですが、このように私が赴任した時には、医療分野での日本の協力は既に相当実施されており、私が実質的に関与したのはサンタクルス総合病院の技術協力のおぜん立てだけでしたが、それを知ってか知らずか寛大なボリビア政府は、私にボリビア厚生勲章を授与してくれることになり、帰国した翌年に、市谷の在京ボリビア大使館で、ホフマン大使から勲章を授与されました。



写真2-3 1987年6月、在京ボリビア大使公邸で行われた厚生勲章授賞式(左から2番目がホフマン大使、中央が筆者)

因みに、ホフマン大使は、私の在勤中、 ラパス消化器疾患研究センターの所長を されており、ホフマン所長の後には、副 所長だったビジャゴメス氏が所長になり ました。その二人には、日本から議員や マスコミ関係者などの来訪者があるたび に、日本の援助の成功事例として同セン ターを見学させてもらったり、援助関係 者が病気の時に診察してもらったり、ま た、日本からの調査団が交通事故にあっ た際に治療してもらったりと、大変お世 話になりました。

因みに、日本からの調査団が交通事故にあったというのは、1984年11月頃で、小生が運転していた車両が、ユンガスに向かう標高4000mの山道で事故にあい、危うく谷底に落ちそうになったというものですが、その話については、またの機会に書かせていただきます。

(終わり)

日本人が見たリベラルタ ーその7-

財団職員

明治大学島嶼文化研究所客員研究員 大島正裕

新垣庸英~越境のひと~

1. シリンゲーロになるまで

リベラルタの意義は、20世紀初頭に主にペルーやブラジルから生活の糧を求めてボリビアへ移住してきた日本人が、一時的に集住したことにある。1910年代にピークを迎えたリベラルタの日本人数は、この街の成長の背景であったゴム・ブームが下り坂になると少しずつ減少していくが、20世紀初頭におけるグローバルな人の移動を検討する際、南米のアマゾン地域を駆け回った日本人が、リベラルタをハブにして移動した事実は大変興味深い。リベラルタは日本人にしばしの安住の場所を提供し、この地から、日本人は、放射状に近隣諸国やボリビア国内の都市や地方に拡散していった。

リベラルタを移動の側面(これを「越境性(transnational)」と呼んでもいい)から見ると、興味深い人物がいる。新垣庸英という人物で、ボリビアの戦前移民の中で屈指の名声を誇り、その生き方は波乱万丈でよく知られている。

最近公刊された三山喬『還流する魂・マブイ 世界のウチナーンチュ120年の物語』(岩波書店、2019年)の中に「アンデスを越えて」という一章があり、そこに新垣に関する記載がある。三山が関係者から聞き取ったところによると、戦後の日本人移住者にとって、新垣は「別格のスペイ

ン語能力と現地社会、諸制度への知識を持 つ企業経営者 | であり、目つ「サンタクル ス市でソーダ工場やカフェ、旅行会社を経 営し、行政との交渉ごとがあれば労を惜し まず新移民を支援した」(同書、51頁)。 しかし、新垣が研究者にとって興味を引く のは、彼が書き残したいわゆる「新垣庸英 日記 | のためだ。この日記の原本は既に失 われたようだが、「16センチ x 10センチの 小型手帳に鉛筆で記された | 日記である。 この日記については以前からよく知られ ていて、貴重な研究論文を数多く掲載した 『移住研究』で、1970年に小野基雄が新垣 の日記を取り上げ、1992年には大塚真琴が 再度取り上げている。但し、新垣日記は紙 の劣化等が原因で読みにくい箇所があり、 転写した筆者により異文が生じたが、これ は文意に解釈を生じるほど大きな差では ない。私の手許には佐藤信壽氏が転写し、 活字化した版があるので、本稿ではこれを 元にして日記を読み進めてみたい。

こうした文字資料は、内容以前にどのように書付けられているのかも資料の特徴を知る上で重要である。大塚の論文「新垣庸英とボリヴィア逃亡移民」2には、この日記の最初のページの写真が掲載されていて、原本の状況についても詳細に書き残している。それによると、日記は2冊に分かれていて、新垣は、断片的につけていた日記を後々抜粋して編集したようにも思われる。また、大塚は、原本を見ながら、後日追記した箇所もあると述べているので、新垣日記には、後年本人による追記された箇所もあるのだが、1910年代後半~20

年代というゴム産業興亡期のペルー、ボリ ビアの日本人の移動の道程を検証できる 資料として、一級の価値がある史料といっ てよい。



写真3-1 新垣の写真(左が庸英、 右が従兄の庸信)²

1970年発行の『日本人ボリヴィア移住史』には新垣へのインタビューも掲載されているが、そこに記載された新垣の出生年は1897 (明治30) 年10月20日で出身地は沖縄県国頭村安波である。特に国頭村は、移民の多い地域として知られている。新垣は、1917 (大正6) 年、20歳のときにペルーに渡ったが、森岡商会のような移民会社との契約移民ではなく、ブラジルにいた友人を頼っての自由移民だった。



写真3-2 新垣日記:大塚によると、「各文頭のまとめの説明は後年新垣氏自身の手で書き加えられたものである」(大塚、104頁)

渡航に際しては、ブラジルに在住してい た友人から「呼寄証明書」を送ってもらっ たという(このような方式を、「呼び寄せ 移民」とも呼ぶ3)。当時は既にブラジル移 民も開始されていたが、新垣は太平洋航路 で、ペルー、チリ及びアルゼンチン経由で ブラジルに入国しようと考えていた。とこ ろが、既にペルーのリマには、新垣の妻の 兄(小野によると、我部政吉4)が住んでお り、ペルーにしばらく立ち寄ったことが新 垣の人生を変えることになる。ペルーでは 良い仕事に恵まれなかったが、そこでボリ ビアのゴム景気についての噂を聞き、一攫 千金を目指して大胆な移動を開始した。こ こからが現在、我々が把握できる新垣日記 の内容となる。

次の地図を見ながら、新垣日記からその移動経路を辿ってみよう 5 。

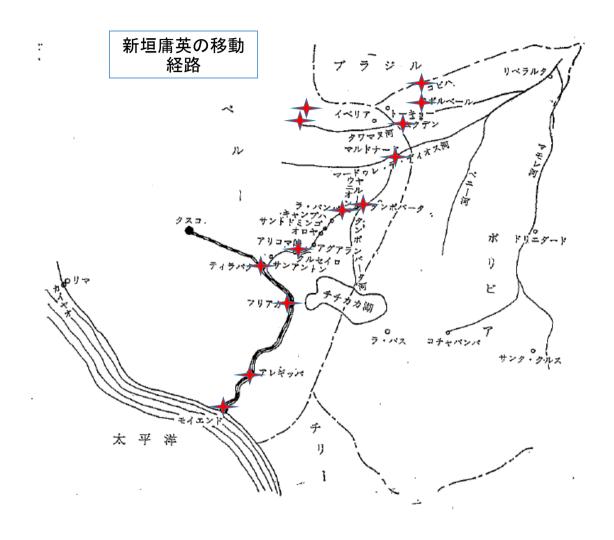


写真3-3 本稿で言及された都市について★でマークした。なお、本地図は、小野、大塚両氏の論考中の地図を筆者が加工した。

「猛獣住み人跡稀で其の間に無限の寶を蔵し居ると云うボリビヤ〔ママ〕国へ好奇心にかられて一攫千金の夢を見つつ住み馴れし都を捨てて立出しは去る大正六年も夏気分漂い氷水など売り出る十月であった。」

日記はこの出だしで始まり、新垣は、ペルーとボリビア国境の道路工事に一行38名の一人として応募し、10月9日にリマ近郊のカジャオ港からボリビア方面へ向けて出発した。おそらく従兄の庸信と行動を共にしていたと思われる。

1917年

10月9日 カリャオ (Callao) 港発 同11日 モリェンド (Mollendo) 港着 同13日 モリェンド発アレキパ (Arequipa) 着 (汽車) 同14日 アレキパ発フリアカ (Juliaca) 着 (汽車)

同15日 フリアカ発 ティラパタ
(Tirapata) 着 (汽車)
同17日ティラパタ発アシリョ (Asillo) 着
(ここからは徒歩)
同19日アシリョ発 同24日クルセロ

(Crucero) 着 同26日発

さて、ここからが有名なアリコマ峠(paso de Aricoma) 越えの旅程となる⁶。既にこの当たりは、アンデス山脈で、標高も4,200 mに至り、一行は高山病にも悩まされ、心細かったであろう。この当たりのことを新垣は以下のように書きつけている。

「同地で一日休み、一行の内身体の疲労した者15名は、馬を傭うてやり、外(ほか)の者は徒歩でアリコマを越すように準備なり。徒歩連中は26日の午後7時頃、各々厚着に身を固め、頬冠りの上、毛布を冠って出掛けた。腰には固(かた)パンやチャンカカその他薬品など用意し万一に備え居る。少時(暫くの間)は皆話しながら一時は歌い乍(なが)ら登って行ったが、夜が更けて坂を上るに従い、寒風はビュービューとうなり出し、雪は積り、天は星一つ見えん真っ暗やみで道も見分け兼ね、先頭の足音を追って進みおくるれば、待ち待っ

ては共に進み、互に相助け相励して登り行 くのであった。

人間は妙な者で、普段は仲悪く睨合い(にらみあい)居る連中も、斯る(かかる) 時には互に慈み(いつくしみ)合い、平生 持ち居る悪感情は消え去って美しい純な 心に戻るのである。これが人間本来の人情 か、世の人間が何時も斯る気持で暮す事が 出来れば人類の幸福此上もないであろう。 そんな事を考えながら登る程に路傍に墓 標あり、而(しか)して日本人の墓標なり と云う。益々心細くなる。何時かの入山隊 の内、此山腹で発病し烈しい寒気と空気の 稀薄とに打負けて、永遠に此の1万5、6千 呎の岩山に恨をのんで眠り居るならん。彼 にも故国には父母兄弟妻子ありて、貧しい 家族を生活難より助け、激甚なる生存競争 に打勝たんとせしか。又は未開な森林地方 を開拓し、我同胞発展に貢献せんとて大な る抱負を持って入り来らんも、不幸にも病 魔の襲う所となりて、中絶したる憾み(う らみ) 思いやるべきなり。而れ共、眠れる 友よ瞑(めい) せよ、汝の骨は此の雪中に 朽つとも、汝の進取の気性に実ある霊は永 久に止まり、後進の同胞を激励し、汝のあ こがれ居たる森林地方の宝庫も我同胞に よって開発せらるる事難事にあらざれば なり。」(句読点や現代仮名遣い等読みや すいよう筆者が修正した。)

このような苦難を乗り越えて、旅程は続く。

同28日キトゥン(Quitun)着 31日ラ・パンパ(La Pampa)着

11月1日カンダモ (Candamo) 着 同2日タンボパタ (Tambopata) 着

このタンボパタは、以前紹介した米国系のインカ・ゴム会社が活動している地域でタンボパターサント・ドミンゴ(Santo Domingo)間道路整備は、インカ・ゴム会社がペルーからコンセッションを受けた際の条件であった(拙稿『日本人が見たリベラルタ ーその3ー』「カントゥータ41号」を参照)。因みにモリェンドからタンボパタまでの総移動距離は384kmに達しており、同区間の旅費は25ソル(1ソル=約1円)(小野、5頁)。当時の日本とペルー間の船賃が90~110円なので、それなりの高額といえる7。

新垣が就労した 「マキシム・ロドリゲ ス」というスペイン人が所有するゴム林の 道路工事現場はさらに奥地で、カヌーにて (新垣の表記に従えば) マルドナード (Maldonado)、ドセルナ (原語不明)、フ ィルメサ (Firmesa) イベリア (Iberia) ノ アヤ (Noaya) と移動し、12月16日にノア ヤで道路工事の仕事を開始した。その年も 暮れたが、12月20日には同行していた山口 県人2名がイベリアで死亡する等不幸も重 なり、無事に正月を迎えたものの、1918年 1月20日に現場から逃亡した。この時、責 任感の強い新垣は、「とっても罪なこと と | 思ったようだが、後から振り返ると 「何でもなかった」と述べている8。そのく らい労働者の逃亡は常態化していたので あろう。因みに逃亡の原因だが、多くの日 本人は就労契約の前に、同地まで移動する

ため移民会社や契約相手先等から旅費を 借金していて、借金を給金から返済する。 しかし、日々の暮らしもあるので、蓄財は うまくいかない。もっとうま味があり、一 攫千金の仕事を求めて「逃亡」を活用して いたようにも思える。もっとも、元来、自 由移民の新垣は旅費については別途自分 で持っていた。

山中の逃走は夜間に紛れて行われ、1月 26日には伊波、河野というシリンゲーロ (ゴム液採取人)の宅に到着した。この当 たりから「ゴム」に関する記載が増えてく る。同宅へ5日滞在後、2月1日、トキヨ (Tokio) にたどり着いた。ここは「トウ キョウ | であり、更に、その先のムクデン (Mukden=奉天、日露戦争の奉天会戦の 戦勝で名付けたか)に2月5日到着した。こ の東京や奉天は、この当たりを移動した日 本人が名付けた地名であり、ゴムの集積地 や郵便物の受け渡し場所等として生まれ た集落である。このルート上には日本人が 広く点在していて、新垣は、同胞人の世話 になりながら、移動していった。そして2 月8日、現在のパンド県の首府コビハ(Cobiia) に到着した。ここで日本人西川(與三郎) 9のところに立ち寄り、2月9日には 玉城なる人物のところに行った。更に、こ こを2月10日に出発し、ポルベニル

(Porvenir) 上流の山中に泊り、2月11日に大城、市松¹⁰両氏の共同漁師小屋に到着した。ここから、従兄の庸信や大城たちと漁業等を行いつつ、新垣はいよいよゴム林で一攫千金を求めることになる。

自動車産業の興隆以降、大量にゴムの需

要が増え、ゴムの買い付けをイギリスが大 規模に展開した結果、新垣が動き回ったこ の当たりでは、大量のポンド金貨が出回っ ていた。これら大量の金貨にありつくには 金貨で決済していたゴム液採取人になる のが手っ取り早い。まず、新垣はシリンゲ ーロを目指すことになる。この当たりから 新垣とリベラルタの縁が生まれてくる。

(つづく)

1日本人移住100周年誌『ボリビアに生きる』、ボリビア日系協会連合会・ボリビア日本人移住100周年移住史編纂委員会 2000年3月刊行、322頁。参考文献の注記書きより。

あったトリニダ市の生存者で、アリコマ峠超 え経験者についてもまとめており、貴重な記 録である。

7 ペルーでは、朝 5 時に起きて夕暮れまでで、1 タレア(tarea:一定の時間で終えられる仕事の単位)をこなして 1 円 20 銭(但し、1 タレアをこなすために 2~3 日必要)。これに対してゴム林での労働は 2 円 50 銭~5 円と非常に割がよかった。ここから考えても旅費はそれなりに高額といえる(伊藤一男『明治海外ニッポン人』PMC 出版、1984年、198頁)。8 『日本人ボリビア移住史』、1970(331頁。参照

9 西川は滋賀県出身、1907年のペル一第4 航海の移住者で、タンボパタで就労後、1916 年に日本人として初めてコビハに定着したと される人物。詳細は『ボリビアに生きる』、 198 頁参照。

10 大塚「新垣庸英とボリヴィア逃亡移民」では、市松ではなく「本松」116 頁と書き写している。

² 大塚真琴「新垣庸英とボリヴィア逃亡移民」 『移住研究』29号、1992年)より。大塚氏 によるとこの写真は、1923年8月1日リベ ラルタ市にて撮影とのこと。

³ ボリビアでは、特に沖縄人が「呼び寄せ」 により、同胞を増やしていったようで、ジェ ームズ・ティグナーは、1917年にリベラルタ で食料品店を経営していた沖縄人比嘉良儀が、 兄弟を「呼び寄せた」のを嚆矢とすると述べ ている(Tigner, James Lawrence,

米国・スタンフォード大学教授、"The Ryukyuans inBolivia", *Hispanic American Historical Review*, 43, no.3 1983, p.211.)
⁴ 小野基雄「アンデスを越えた人々ーボリビア日本人の先駆者」(『移住研究』 6号、1970年)、8頁。

⁵ 本移動路の整理にあたっては、佐藤信壽氏の整理によるところが大である。なお、地図については、小野、大塚両氏掲載の地図を元に筆者が加工したものである。また、両氏の論文は、この分野の研究では先駆的、且つ良質の研究成果であり、これに拙稿で度々使用している『日本人ボリビア移住史編纂委員会編と『ボリビアに生きる』を併せれば、現在の研究全体を見通せるように思う。

⁶ 小野「アンデスを越えた人々ーボリビア日本人の先駆者」を参照。小野は、当時存命で

オリンピック・ボリビア選手 応援記念Tシャツ紹介

東京オリンピックでボリビアのホストタウンとなった東京・墨田区の iU(i専門職大学)グッズサークルの学生たちが企画デザインを担当。地元墨田区のメリヤス会社との小さな産学連携ですが今後ボリビアとの交流を続ける上で大きな一歩としてボリビア応援シャツを製作しました

生地は最高級エジプト綿を使用した肌 触りの良い編地。縫製はその素材を活かす ため工夫を重ねた墨田の技術力。

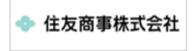
そして若い感性が五輪からのインスピレーションを受けコロナ禍でどのような応援ができるのかをデザインに込めたまさに夢のコラボでモデルの二人も学生。 1着:2500円(送料+税込)です。

注文サイト

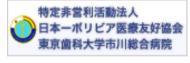
http://www.local-action.tokyo/?page_id=2

編集委員 椿 秀洋 杉浦 篤 細菅 惠子

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎













Copyright© 2002-2021

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)